

リモートの対話というものに慣れていないからかもしれないが、なにかとても不気味で、未だに背筋が寒くなることがある。

距離感が歪み、うろたえてしまうのである。

コロナ禍による在宅勤務が続く、長く顔をつき合わせていない仕事仲間とZOOM会議で久しぶりに打ち合わせをしたりするときは、手を振ったり、「どうしてた？」と画面に張りつくようにしゃべる。つい声も大きくなる。が、あるとき、オンラインで人さまが対談している動画を見たとき、その不気味に襲われた。著名人どうしがオンラインで言葉を交わしているのだが、それぞれがまるでわたしに向かって話しているように見える。二人ともこちら(じつさいには備え付けのカメラ)に向かってしゃべっているのだから。彼らとの距離が仲間のそれと変わらない感覚にとまどった。なじんだ顔と、何のつながりもない顔が、同じ次元で、同じように語りかけてくる感覚にうろたえた。顔なじみが向こうへ遠ざかってゆくような怖さもあった。

ZOOMでの対談では、職業柄、つい相手の人の背景に映っている書棚の本の並びや仕事場の設えに眼がいく。面と向かって話しながらひそかに視線がそちらへ逸れると、何かやましいことをしている気分になる。フリーランスの異性の編集者から、それもその私室からインタビューを受けたときなど、ふだんそんな場所に立ち入ることはおおよそないから、まるで「のぞき見」しているかのような気分になり、心中穏やかでなかった。

これを「窃視症」と呼ぶとすれば、それはじつはずっと以前からあった。テレビの出現と同時にそれは始まった。相手はわたしに向かつてしゃべっている。だが見られているはずのわたしの姿はその人からは見えない。逆にわたしは相手に気づかれることなく、その人の表情から指先の動きや服装まで、なめるように見ることが出来る。まるでマジックミラー越しに見るように、遠慮なく観察することができる。これがわたしたちの日常となつてから、電車のなかでも知らない人をじつと眺めるといふ、まともとはいえない視線を向けられるようになった。

が、これは関係の発端としては異例である。そんな出会いを、いま、大学に入ったばかりの人たちが強いられているかと思うと、なんとも気の毒になる。せっかく入学したのに、キャンパスに足を踏み入れたことがなく、「先生」といわれる人のなまの風情にふれたこともない。

大学での学びとは、知識を教わることではない。何かが不明なとき、何かを疑問に思うとき、そういう方向喪失から抜け出すには何をどんなふうに知ることが肝心か。それを体得するのが学びである、そのためにこそ「先生」といわれる先達の、その問い方、資料の集め方、分析のやり方に体でふれる。いや、盗みと言ったほうがいいかもしれない。先にそれを身につけた仲間から盗むのも、場合によっては手っ取り早い。

なかでも大事なものは、じぶんのこれまでのやり方の狭さと偏りに気づかされることだ。世界をもっと開くこと。そのために学びはある。オンラインという、ごく狭い空間ではそれがかなわない。見るだけ、聞くだけの受け身の授業では、学びに不可欠の体感のシグナルがはたきださない。手足を縛られた学びに意味はない。

それに彼らは学籍番号で確認されても、未だその名で呼びだされていない。こんな不幸な学びがあるうか。オンラインは一つの方法ではありえても、学びの中核をなすものではない。

(鷺田清二「時のおもり」 中日新聞より)

問 本文をもとにAさんからDさんまでの四人が感想を述べました。本文の主張を最もよく反映して発言している人物を、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

Aさん 「たしかにパソコン画面に向かって話すことには、まだまだ違和感があります。でも、これは災害などがあつた時にも使える便利な技術なので、これを機会に私たち学生も体験して、オンラインでの授業にも慣れていくべきだと思います。」

Bさん 「コロナ禍によって、オンライン授業が導入されたことで、家においても勉強する機会が増えると思います。学校に行きたくない時にも授業を受けることができるので、これからも積極的にオンライン授業を取り入れるべきだと思います。」

Cさん 「ネットを通して学ぶ機会が、コロナ禍のもとで増えています。しかし、先生や他の生徒と直接対面して学ぶことには、相手と直接関わることでしか得られないものがたくさんあると思います。やはり何かを学ぶには、人と人とが同じ空間にすることが必要だと思います。」

Dさん 「ZOOM会議やオンライン授業など、コロナ禍のもとで新しい取り組みが始まっています。しかしこれらの技術だけでは、本当の学びにはつながりにくいと思うので、ノートの郵送などオンラインに頼らないやりとりを加えていかないと思います。」

ア Aさん    イ Bさん    ウ Cさん    エ Dさん